

# 美術科の主張

## 1 教科で育みたい人間像

「美術の授業で知った“私らしさ”を高校生になっても大人になっても大切にしたいです。」卒業して  
5  
く生徒が卒業文集の片隅に書いてくれた言葉だ。美術はその子らしさを大切にすることができる教科であり、子らしさを育むことができる教科であると考えている。美術科における表現と鑑賞の真ん中には、常に  
“自分”がいる。表現活動では、表したい主題を自分で決め、どのように表現するかを自分で考え、制作に  
取り組む。鑑賞活動では、作品を鑑賞して自分がどのように感じ取ったのかを考える。自分と切っても切り  
離せない教科である。子どもたちは自分らしい色使い、自分らしい形、自分らしい感じ方を追求していく中  
10  
で、自分と向き合ったり、新しい自分に出会ったりする。

美術科では、「自分の想いをもち、豊かな感性を働かせながら自分らしく創造していく人」を育ててい  
きたいと考えている。そのために、アート思考が欠かせない。アート思考とは、アーティストが「0」から  
「1」を生み出すための思考の過程で、常識にとらわれない自由さが必要とされる。子どもたちは、  
「こうしたい」という想いをもち、そのためにどうすればよいかアート思考を働かせながら試行錯誤し、作  
15  
品を完成させていく。VUCA の時代といわれる今、世間でもアート思考が注目されている。予測困難な時代  
の中で、課題の解決をはかるために、常識を超える自由な発想は、世の中を変える力にもなってゆくだらう。  
また、昨日までの常識や価値観が一瞬にして変わる世の中を私たちは生きている。最新の高性能AI がどれ  
だけ膨大なデータを学習、分析しようとも過去のデータから導き出された最適解であり、新たに生み出され  
たものではない。過去の常識を越え、新しいものを生み出すことができるのは、感性を備えた人間にしかで  
20  
きないことである。子どもたちには、「こうしたい」という自分の想いをもち、豊かな感性を働かせながら、  
自分らしく未来を創造できる人になってほしい。そして、幸せな人生を歩んでほしいと願っている。

## 2 教科で願う子どもの学び

技能的には高くないが、心惹かれる子どもの作品に出会うことがある。また、そんな作品を大切に持  
25  
ち帰る子どもの姿を見ると嬉しい気持ちになる。その作品には、その子の想いがあり、その子らしさがつま  
まっている。「こうしたい」という想いが意欲につながり、相手の心を惹きつける作品になるのだと考える。  
そして、想いをもち作品と向き合うことで、作品に愛着も生まれるのだらう。授業では、子どもたちが自  
分の想いをもち取り組めるような題材との出会いを大切にしていきたい。

美術科では、願う学びを「感性を豊かに働かせながら、自分の想いを表現するために、造形的な視点をも  
30  
って試行錯誤し、自分らしさを追求すること」とした。

ほとんどの子どもたちは、プロの画家やデザイナーを目指しているわけではない。義務教育の美術の授業  
の目的は、美術の専門家を育むことではない。教師は教える存在ではなく、気づきのきっかけを提供する存  
在でありたい。造形的な視点をもって試行錯誤しながら表現したり、鑑賞したりする中で子どもたちは多くの  
気づきを得るだろう。「この色と色の組み合わせがきれいだな」「この形がおもしろいな」と感性を働かせ  
35  
ながら活動していく中で、自分らしさは育まれていくと考える。さらに、制作を通して自分と向き合ったり、  
相手や社会と自分との関係を考えたりすることで、こうありたいという自分も思い描くことができるだろ  
う。また、表現したことを誰かに認めてもらった経験が、自分らしく生きることへの自信につながっていく  
のだと思う。

卒業文集の片隅に書いてあった「私らしさ」とは、3年間自分と向き合い続けながら授業に取り組んだ経  
40  
験とそれを周りに認めてもらった経験の2つから生まれた「自分らしさ」であると考えている。

美術の授業を通して、様々な「ひと」「こと」「もの」と向き合い、新たな価値に気づきながら、自分らし  
い表現、自分らしい感じ方を知り、豊かな感性を育ててほしいと願っている。3年間の美術を通して、仲間  
と共に、「自分らしい表現」「自分らしい感じ方」を追求し、自分らしさを育てていけるような授業をめざす  
とともに、そんな子どもが育つことを願っている。